

金澤家柄の町人の一人にて、屋號を平野屋、氏を山岸と稱し、世々半助と呼べり。十二冊定書元祿十四年金澤町人拜領屋敷并町役等赦免取調書に、平野屋半助、貞享二年町年寄就被仰付、町役御赦免、町中より餘荷。とありて、數代居住すといへども、明治廢藩の後零落して家屋を賣却し、子孫遂に絶炊すと云ふ。

○平野屋半助傳

由緒書に云ふ。元祖半助は、河内國平野の者にて、山岸半助と云ひ、上方に於て利家卿の御用を命ぜられ、金澤御入城の刻被爲召、御跡より罷下り、則ち御城下尾坂下に居屋敷拜領し、平野屋半助と名乗り、此時より代々御目見被仰付。慶長七年二月歿す。二代平野屋道知は、利常卿より上使宿被仰付、中町に於て居屋敷拜領、風呂場等まで爲建被下。且御印并に御眞筆まで頂戴被仰付。

長瀬五郎右衛門

筑前守様御意に付而、金澤平野屋半助拜領地之儀達御耳、御印被下候。以上。

印卯月廿一日

取次 淺野 藤左衛門

眞筆寫
一書申遣候。さくじいかゞいたし候や。何ほど出來候や、承度候。恐々謹言。

三日晝

利

半助殿へ

右作事出來落成の後、度々御腰被爲掛、其の後唐物の茶入所持仕由御聽に達し、長如庵老方へ被爲成刻御覽被遊度由、坂井春庵より書狀を以被仰出。其の文に云ふ。

尙々いそぎ可參候。以上。

其方手前にめづらしき茶入有之由、御みに相立候。今朝長如庵所へ御成之刻、そこしかけて御覽可被爲成旨、御誂に候條、いかにもおんみつにいたし、そとろぢまでもちて可參候。はや／＼いそぎ可申候。

十月十九日

壽

庵

平のや參る

右茶入則ち持參、御腰懸にて入御覽。其の後小堀遠州へ被遣、平野文琳と名付けられ、名物に相成に付、料物可奉願旨被仰出故、何にても御茶入拜領仕度旨申上げ、る處、

御茶入并判金貳拾枚・御卷上下拜領被爲仰付。公方様御成之刻も、江戸へ相詰可申旨、御老中より奉書を以て被仰出。

今度皆々此地御見廻申上度之旨、御耳に相立申處、御祝着之思召に候。御成之刻、御用可申遣由御意に候。乍大儀被相急、來月十六・七日時分下着候様に被罷立尤候。恐々謹言。

三月廿七日

横大膳亮

奥因幡守

奥河内守

平野屋道知老

金屋宗仁老

越前屋次郎兵衛殿

越前屋孫兵衛殿

右就被仰出、則罷越處、御書院臺子茶道役被爲仰付、御用相勤、御料理頂戴、拜領物被仰付。且御上洛之刻、爲伺御機嫌罷登、御逗留之内京都に相詰、御歸國の時分膳所焼之茶入拜領仰付けられ、御餌柄之雁、鴨度々拜領、且口切之御

茶・御肴毎年指上。寛永十年六月歿す。三代平野屋半助も、親同事上使宿相勤めける處、寛永十三年御城下町替之刻、御城へ被爲召、町割之御繪圖を以て、勝手宜しき所可奉願旨被仰出、只今罷在居屋敷地奉願處、町並裏行之外に四間通り長く被下、并御植木迄拜領被仰付。且嫡子三十郎儀御尋被遊、御目見仕處、兒小將に被召出、家祿三百石被下、山岸三十郎と名乗、毎年江戸御供被仰付、重ねて貳百石御加恩、都合五百石被下。其砌半助儀、堂形藏米奉行被仰付、請拂方相勤、御直筆之御書・御印物・定書等頂戴相務。小松御隱居後、小松へ相詰、兼卷之御脇判拜領被仰付。綱紀卿御家督之節、江戸へ罷越、御肴獻上、御懇之御意に而御料理被下、御紋付・御小袖拜領被仰付、御袍着之節、爲伺御容舛飛脚を以申上。慶安三年閏十月歿。四代平野屋半助、父忌明の上、小松へ罷越、父遺物獻上、名も半助と可改旨、津田玄蕃殿を以被仰出、御目見被仰付。五代半助以後、金澤町年寄役相勤と云々。

○伊勢旅屋跡

横堤町の旅屋と稱し、舊藩中は神殿飾をなしたり。此の旅